

教員志願者の減少

校長 相川 保 敏

今年度前期の教育実習が6月12日(月)まで行われました。相山女学園大学教育学部4年生16名が運動会の日から3週間の教育実習に取り組みました。実習を終えた学生から、

- ・実習前は不安ばかりあったけれど、ずっと実習が続いてほしいと思った。
- ・子どもたちがかわいくて、別れるのがとてもつらかった。
- ・実習最後のお別れ会は涙、涙でした。
- ・何とか採用試験に合格して、本当の先生になりたいと思った。

と言った声が聞かれました。教育実習を体験することで、教員の大変さだけではなく、楽しさややりがいを感じ取ることができたように思います。

ところで、教員採用試験の倍率が年々低下しているのをご存じでしょうか。小学校の教員希望者を例にいたしますと、2000年採用予定の試験では全国平均で12.5倍であった倍率が、2012年では4.4倍まで激減しています。そして、その後の10年間でさらに2.5倍まで減少しています。一般的に3倍を切るとよい人材を確保できないと言われていたので、危機的な状態になっていると考えられます。

こうした中、文部科学省は5月31日に毎年夏に行っている教員採用1次試験を来年度は6月16日を目安に前倒しするよう、都道府県などに検討を求めました。都道府県などで行われる教員採用試験は7月ごろに1次試験が行われ、4月・5月に始まる公務員試験や、6月に採用面接が始まる民間企業に先行されることで、受験者の減少につながっているという指摘もあります。これを考慮したものと言えます。

前倒ししていくことで、他の業種に流入していくことを防ぐ狙いですが、課題としてほとんどの大学で4

年生の春ごろに行われる教育実習と時期が重なる可能性があり、文部科学省は、3年生までの間に学校現場を体験させるなど大学が柔軟な履修方法を検討することが必要だとしています。本校での教育実習にも影響を与えることが想定されます。

しかし、前倒しが教員志願者減少の妙薬になるのでしょうか。日本若者協議会が就職を控える高校生・大学生・大学院生を対象に行った「教員志望者の学生が減っている理由」を尋ねたアンケートの結果の主な理由を見ると、

- 長時間労働など過酷な労働環境 94%、
- 部活顧問など本業以外の業務が多い 77%
- 待遇(給料)が良くない 67%
- 保護者や地域住民への対応が負担 57%

と続きます。労働環境の改善、業務の軽減、待遇の見直し、保護者や地域との連携を図っていく必要があります。これらは、以前から問題視されている点ですが、国は改善まで至っていない現状です。

本校は、教育実習生の感想から魅力ある職場に見られているようです。その基盤は、お子様のことだけでなく、他のお子様、学級、学年、そして学校全体を考えたご理解とご協力を、保護者の皆様から頂いているからであると感謝しております。今後もお子様のために、二人三脚で取り組んでいきたいと考えます。

さて、今月の生活目標は「相手のことも考えよう」です。相手のこと「を」でなく「も」になっています。「自分」と「相手」を天秤にかけ、どのぐらいのウエイトをそれぞれにかけたらいのでしょうか。相手が誰なのか、どんな状況なのか、これまでの関係性…などで、変わってくることも想定されます。具体的にどんな目標を子どもたちは設定するのか楽しみで